

2021.01.24

【恵みの独り占め？】

ローマの信徒への手紙9章

9:6 ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません。

イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、

9:7 また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない。

かえて、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」

9:8 すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。

9:9 約束の言葉は、「来年の今ごろに、わたしは来る。

そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。

9:10 それだけではなく、リベカが、一人の人、つまりわたしたちの父イサクによって身ごもった場合にも、同じことが言えます。

9:11、12 その子供たちがまだ生まれもせず、善いことも悪いことも

していないのに、「兄は弟に仕えるであろう」とリベカに告げられました。

それは、自由な選びによる神の計画が人の行いにはよらず、

お召しになる方によって進められるためでした。

9:13 「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と

書いてあるとおりです。

+++++

1) 当時のイスラエルの人たちの認識

その当時のイスラエルの人たち、ユダヤ人たちの一般的な発想は「選民思想」と呼ばれる

「自分たちは歴史的に特別な存在」「神は私たちの人種をことさらに愛しておられる」というもので、ユダヤ人以外の人たちを「異邦人」として見下し、あるいは軽蔑し、関係を避けていました。それはある意味で今でも、色々な形でユダヤ人のみならず、キリスト教会の中にさえ入り込んでいる深刻な「人間的優越思想」だと思います。

人種、宗教、肌の色、教育、文化の違いを土台にして人を見下す空気はいつの時代にもありました。しかし、そこに「神」を持ち出すことで、圧倒的な優越意識を植え付け、議論の余地がないほど、平気で他者を軽蔑する空気を作ってしまうことも多々ありました。

それは本当に注意が必要な内容です。

旧約聖書にある約束「「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」とあるのだからユダヤ人は当然そこに当てはまるではないかと多くのユダヤ人が考え、それを盾にして自分たちこそ特別な存在だと考えていたのですが、パウロはそれは違うと語るのです。

そもそもパウロは異邦人に対してキリストの福音を宣べ伝えていたわけですから、ユダヤ人たちから見れば「馬鹿なことをやっている」と映ったに違いありません。

2) 神による選びとその根拠

パウロはこう弁明します。

「イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、

9:7 また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない。

「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」すなわち肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされる。」

人種としてのユダヤ人だけが神に選ばれているのであれば、何も約束は要らなかったし、アブラハムの子孫、親戚であればそれで良かったわけですから、本当に血のつながりだけが問題になりました。

でも、そうだとしたら、神様は極度にえこひいきなさる神ということになります。

また、人間的な要素だけが神からの愛を受け取る資格になるとしたら、男性優位、成績や能力優位、社会的成功者優位ということになり、それもまた不公平極まりない形になります。

社会にはそれに該当しない人の方が圧倒的に多いからです。

神の約束に従って生まれる子、という表現がありますが、これはアブラハムとサラの物語を知らないとなかなか理解が困難です。

アブラハムは75歳で行先を知らずに神の約束を信じて新しい地へと出発します。

その時点では彼らに子供はいませんでした。

でも神様は、アブラハムとサラとの間に生まれる子供こそ、祝福の基となる子供だということです。彼らは長い間、待ちますがなかなか子供は生まれません。

途中、もう待ちきれなくてサラがアブラハムに奴隷のハガルとの間に子供を作ったら良いと入れ知恵し、子供が生まれるのですが、それは神様の計画とは違いましたので、その子がアブラハムの子孫という流れをつぐ存在にはなりません。

しかし、人間的には到底無理だと考えられる年齢になったとき、不思議なことが起こります。

サラとアブラハムの間にイサクが誕生するので、それは人間的には無理なことであり、神の約束と介入がなければまったく荒唐無稽な出来事だったのです。

つまり、神の祝福というのは人間の計画をはるかに超えたものであり、神のタイミングと神の計画によって個人にもたらされ、またその個人を通して広げられていくものだというメッセージがここにあるのです。

単純にアブラハムの親戚だからとか、人間的に観て宗教者として熱心だったから、神の祝福を得られるということではなく、神の側からの約束、介入があるからこそ、神の祝福を受けられる存在となるのだということです。

### 3) 神の自由な選びと祝福

神の祝福というのは人間の配慮、計画を遥かに超えて、神の主権によって、神様が自由に提供できるものとパウロは主張しています。

アブラハムの息子イサクには双子のヤコブとエサウが誕生しました。

そのふたりについて神は「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ」と言われるのですが、人間的にみたらエゴ彘頭のように見えますが、パウロはこれは神の主権、統治権による自由な裁量であり、人間にはとやかく言えないものだと言っているのです。

つまり、パウロは神は自由にユダヤ人の中からも異邦人の中からも神を求める人たちを起し、祝福を提供しているということです。

そして、誰に対して神が祝福を提供なさるかということについては、人間の努力や才能、人種、家系などによるものではなく、神の自由な裁量によるものであり、神の側からの働きかけが届いた

人であれば誰でも受け取ることができるというのです。

こういう話を聞くと「神に愛され、介入を受けた人は良いけれど、そうでない人はどうなのだろう」という方向に考えが進みます。それについては徐々に見えてくることになりま

す。そして、この9章から11章はパウロが選民意識の中に凝り固まり、傲慢になり、他者を軽蔑することをよしとしているユダヤ人たちに対する弁明ですから、かなり極端な言い方になっています。私たちににとっては「神は特定の人種だけを愛している」ということではないのだなとわかれば良いのだと思います。

逆に言えば、「まったく自由である神が、愛される資格があるわけでもないような私を愛してくださっているのだな」と感謝できれば良いのです。人間的に見たら、私などより神に愛された方が良い人がたくさんいるようにさえ思えますが、それでも私を愛してくださった、私にいろいろなことを教え、気づきを与えてくださっているというこの幸いを深く味えたら良いですね。

なんの資格もない人たちへの神の祝福はすでに届いているのですが、それに気づき、感謝と礼拝を捧げる人があまりに少ないと考えると良いのかも

しれません。宝くじは全ての人に当たっているのに、それを引き取りにくる人がほとんどいないような状況と似ています。

もったいない話です。

逆に自分たちだけが宝くじに当たったので他の人には賞品を渡さないでほしいと神に訴えたり、他者を押さえつけたりすることは神の心とは合致していません。

当時のユダヤ人たちの心はそういう心だったのだと思います。

恵みの独り占めを決め込んで、勝手に神に喜ばれる道はこれだと決めつけて他者を軽蔑し、自らも律法主義の中に縛り付けていったのです。

私たちは、そういう生き方を厳に慎まなければなりません。

神への感謝と礼拝、そして「いてくれてありがとう」を分かち合いながら前に進みたいものです。

+++

Youtubeの映像はこちらです。

<https://youtu.be/0IGsaiosRY8>